

Rip(texte) et Brunner, Zyg(illus.)

Plus ça change.

Paris, L. Vogel, 1922(printing) (文献番号9-169)

リップ文 ブリュナー画
変われば変わるほど

1915年9月にパリのテアトル・ミシェルで初演され、その後1918年と1919年の10月に同劇場で再演された楽しいコメディの脚本。本書の刊行者L.ヴォージェルといえば当時の最新モード誌や雑誌の著名な編集者であり、例により特別の手漉き紙に特別の字体を美的に配置し、ポシヨワールよるアール・デコ風な挿絵をそえて、愛書家むきの贅沢な一冊本に仕立ててある。タイムマシーンに乗ってさまざまな時代に旅するというこの劇のストーリーが、場面転換の面白さを想像させ、イラストレーターに格好のテーマを与えている。

時は西暦2018年、ジョリボワ氏は、愛人シドニーがキキと呼ぶ若い男と親しくなったのに嫌気が差して、ビスキュイ教授発明のタイムマシンに乗って旅立つところから劇は始まる。最初に着いたのがルイ14世時代、浮き名も高いかのニノン・ド・ランクロの館。魅惑的なニノンがこの手にとったときに現れたのが愛人の伯爵、早々に立ち去って次に訪れたのはシャルル6世の宮廷。狂気の王と道化、そして狙い定めた王妃イザボーにはギャラントな吟遊詩人がいた。そこで一足飛びに古代ギリシアのアテネへ、しかし言い寄ったフィリネにはまたしても若い恋人が……ついに先史時代の森の中、ここでも老いた猿は若い猿に恋人を横取りされる。かくしてもどったのが2018年のシドニーの部屋、ジョリボワ氏はこう歌う。「旅に出て分かったことは、変われば変わるほどそれは同じだということ。お天道様の下では何もかも同じなのだ。」それもそのはず、ニノン・ド・ランクロもイザボーもフィリネもシドニーと同役、そして恋した女性を横取りしていく若者は全部キキと同役、またか、と嘆きたくなるのも当たり前配役になっているのだ。

1918年の公演には、革命真っ盛りの1793年のパリと、クレオパトラが登場する紀元前のアレキサンドリアの二幕が加わり、舞台装置と衣裳デザインはポール・ポワレが担当した。おそらく原色を用いた強烈な色彩と鮮やかな装飾で、ポワレ特有の世界を創作したであろうと想像される。P.ホワイトの『ポワレ』(1973) <383. 1-P>によれば、「ルイ14世時代の場面ではグリーンとピンクの二色を使い、ピンクの空に青屋根の城が背景、シャルルの時代には中世教会を真似た金と赤のステンドグラスをかかげ、テクノロジー時代を予測した21世紀には全体を白と黒だけでまとめた。」となっている。ブリュナーの絵には、ポワレの舞台装飾や衣裳デザインの跡が残っていると思われる。ちなみに1919年の衣裳デザインはM.ミュエルに代わっている。ブリュナー (Sigsmond Léopold ou Zyg Brunner) は漫画家としても知られ、新聞にルポの挿絵を書いたりしているが、本書の作品が代表作となっている。また劇作家であり風刺作家でもあるリップ (G. Thenon Rip 1884—1941) はこの時期に活躍し、作品は常に好評を博し

たといわれる。

図左は第1幕「出発」。図右はシャルル6世の治下。

(辻)

